平成 25 年度　大学生の力を活用した集落復興支援事業　報告書

「古殿町大久田地区における
地域活性化策の提言および実証実験」

東北大学地域密着 Lab

2014 年 3 月 20 日

目次

Ⅰ．はじめに 1
Ⅱ．古殿町と大久田地区の概要 2
Ⅲ．1 年目（2012 年）の事業概要 5
　１．事業概要 5
　２．大久田地区の課題 6
　３．大久田地区の魅力 7
　４．活性化策の提言 8
Ⅳ．本年度（2013 年）の事業 10
　１．事業概要 10
　２．民泊実証実験 11
　３．祭りへの参加 14
　４．郷土料理の露店実験 16
　５．まとめ 21
Ⅴ．おわりに 22

Ⅰ．はじめに

我々「東北大学地域密着 Lab」は，東北大学理学部地理学教室に在籍し，主に人文地理学を専攻している学生・院生約 10 名によって構成されたグループである．2012 年度より古殿町の「大久田(おおぐた)地区」において地域活性化のための活動を行ってきた．この報告書は我々と地区住民の方々による，2 年間の活動を記録したものである．

活動 1 年目の 2012 年度は，大久田地区の魅力と課題を探ることを目的として，地区住民へのヒアリングやアンケート調査，マインドマップによる魅力分析，郷土料理の魅力再発見を行った．本報告書ではⅢ章でその概要を述べるが，詳しくは前年の報告書[1]を参照していただきたい．

本年度(2013 年度)は前年度に提言した活性化策実行の年ということで，民泊の実証実験と地区内の祭りへの参加，郷土料理販売の実証実験を行った．詳細についてはⅣ章で述べる．

本報告書が地区の方々をはじめとする大久田地区関係者，また地区外で活性化事業を行う方々にとって，少しでも活性化事業のヒントとなることができれば幸いである．

[1] 平成 24 年度 大学生の力を活用した集落復興支援事業報告書「古殿町大久田地区の持続可能な地域活性化策の模索」http://wwwcms.pref.fukushima.jp/download/1/daigakuseizigyou_report_H24touhokudaigaku.pdf

Ⅱ．古殿町と大久田地区の概要

大久田地区は，福島県石川郡古殿町の一部を構成し，字越代，字下大久田，字高房，字松久保の行政単位からなる．古殿町は 1955 年に宮本村と竹貫村が合併してできた町であり，県南東部に位置し，平田村(北側)，いわき市(東側)，鮫川村(南側)，石川町(西側)と接する(図 1)．古殿町の面積 163 ㎢に対して大久田地区は 41.5 ㎢と，町の約 25%を占める．古殿町の行政地区割りは 10 地区に分かれていることらも大久田地区の大きさが際立つ．

町内には東西を走る県道 14 号いわき石川線と国道 349 号線が幹線道路として走っており，いわき市や石川町，鮫川村へのアクセスが良好である．また大久田地区にはいわき石川線と交差する県道 135 号三株下市萱小川線がいわき市境まで走っている．2010 年交通センサスによると，昼間 12 時間自動車類交通量はいわき石川線で 3655 台，国道 349 号線で 1985 台，三株下市萱小川線で 222 台である．幹線道路 2 路線に比べ，大久田地区内を走る三株下市萱小川の交通量は桁違いに少なく，自動車道路網の発達による便益を十分享受できていな可能性がある．

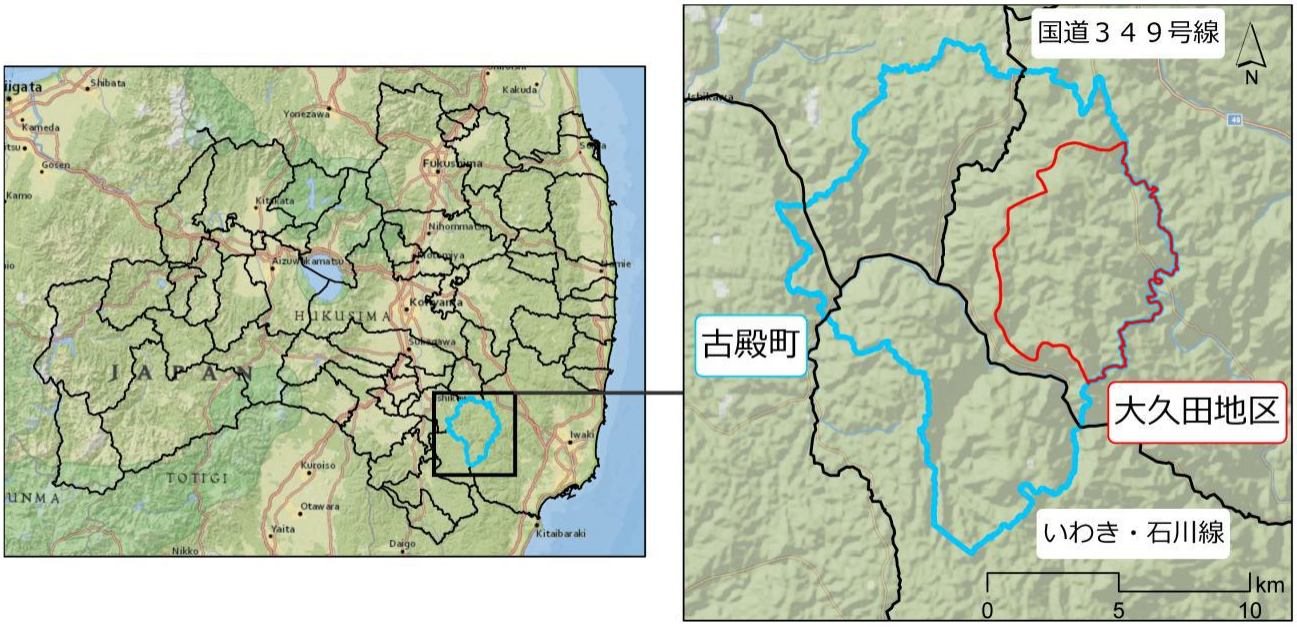

図 1　古殿町(青枠)と大久田地区(赤枠)の位置図

大久田地区の最大の特徴は山林である．国土交通省の数値情報を用いて大久田地区の土地利用を確認すると，地区の 88%にあたる 36.7 ㎢が林地である(図 2)．残る 4.8 ㎢のうち，農用地とその他(住宅地や交通用地など)がそれぞれ 2.4 ㎢(6%)である．すなわち，大久田地区は山に囲まれた自然豊かな地区であることが読み取れる．この傾向は古殿町においても同様で，林地の占める割合は 82%である．大久田地区ならびに古殿町は林業の盛んな土地柄だと言える．2010 年農林業センサスによると，大久田地区は古殿町全体と比べて，農業を行う経営体より林業を行う経営体の方が多い(表 1)．特に林作業受託を行う経営体数に関して，大久田地区は古殿町全体の 56%を占める(表 2)．このように大久田地区は古殿町の中でも林業が盛んな地域であることがわかる．ここで，大久田地区と古殿町の大きな違いは，大久田地区の

林地に占める国有林の割合の高さにある．古殿町の 37%に対して大久田地区は 57%と高く，国有林の整備や伐採など事業は国の行政に左右されるため，大久田地区はその影響をより強く受けていると言える．

林業について 1 経営体あたりの所有山林面積をみると，古殿町では 10.97ha で，県平均の 21.62ha の半分程度である[2]．農業についても総農家[3]で比較すると，1 農家あたりの経営耕地面積は古殿町で 0.72ha，大久田地区で 0.85ha であり，県平均の 1.24ha よりも小さい[4]．他方，耕作放棄地面積率は古殿町で 30.7%，大久田地区では 39.1%であり，大久田地区では県平均の 13.03%の約 3 倍である[5]．これら特徴から古殿町の農林業が大規模化しにくく，現在の農林業政策で行われている補助事業の便益を享受しにくいと言える．

大久田地区の人口は，2010年現在529人である．年齢構成を確認すると，14歳未満の若年人口は54人，15歳以上64歳未満の生産年齢人口は309人，65歳以上の高齢者人口は166人である．高齢化率は31.4%であるが，これは古殿町の高齢化率が31.1%，福島県全体の高齢化率が25%であることを考えると，それほど高いとは言えない．高齢化の問題は大久田地区だけではなく福島県全体にある問題といえる．10年前の2000年，大久田地区の人口は677人であった．その内訳は若年人口95人，生産年齢人口380人，高齢者人口202人で，高齢化率は29.8%であった．大久田地区の高齢化率はこの10年間で1.5%増加したが，高齢者人口そのものは17.8%減少したのである．高齢化の問題では75歳以上の女性人口が増えていること，50歳代のベビーブーム世代付近の人口が今後高齢者人口に含まれ，高齢化率が急激に上昇すること，が指摘できる．10年後の高齢化を単純に予想すると，2020年の高齢化率は44%に達する可能性がある[6]．だが，それ以上に大きな問題と考えられるのは，人口減少である．地区の人口は10年間で21.9%も減少し，若年人口に至っては43.2%も減少した．このペースで人口減少が進むならば，2040年に地区の人口は半減，2080年には100人を切ってしまう．

すなわち，大久田地区に必要なのは高齢化以上に人口減少に歯止めをかけることである．その対策は，早ければ早いほど人口減少の負担が小さくなる．そのためにも地域に眠る魅力や地域の底力を一旦整理し，アイディアを行動に移すことが肝要となる．

---

[2] 大久田地区については，農林業センサスのデータの制約があり確認することができなかった．

[3] 総農家とは経営耕地面積が 10 アール以上又は農産物販売金額が 15 万円以上の世帯であり，販売農家も自給的農家も含められる．

[4] 2010 年農林業センサス都道府県別統計書による．

[5] 2010 年農林業センサス集落カード http://e-stat.go.jp/SG2/eStatGIS/page/download.html による．

[6] 推計では，人口の減少度合いを考慮に入れていないため，過激な予想である．

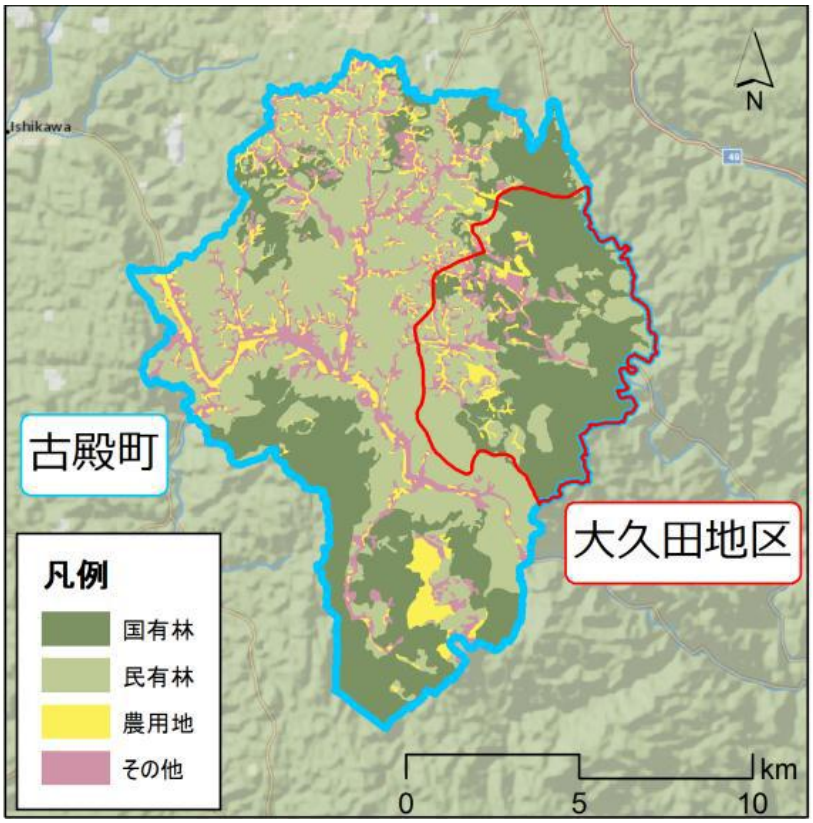

図 2　大久田地区の土地利用現況

表 1　経営タイプ別農林業経営体数①（単位：経営体）

	農林業経営体計	農業のみを行う	林業のみを行う	農業と林業を併せて行う
古殿町	606	22	7	577
大久田	95	3	5	87

表 2　経営タイプ別農林業経営体数②（単位：経営体）

	農林業経営体計	農産物生産を行う	林産物生産を行う	農作業受託を行う	林作業受託を行う
古殿町	606	597	580	46	16
大久田	95	90	89	7	9

Ⅲ．１年目（2012 年）の事業概要

１．事業概要

1年目の活動を表 3に示した．1年目は，大久田地区の魅力と課題を探るため，地区住民へのヒアリングとアンケート調査による地区の現状把握，マインドマップによる地区の魅力分析(図 3)，郷土料理の魅力再発見(写真 1)を実施した．アンケートは大久田地区の全145世帯に配布し，有効回答90世帯を得た(回収率61%)．マインドマップは，「大久田地区」という単語を起点として放射状に連想する言葉を記述していく形を取り，大学生9名，地区住民5名，県庁職員1名の計15名がそれぞれ作成した．郷土料理の再発見では，地区の方々に郷土料理を作ってもらい，かつ我々も料理を観察，手伝う活動を行った．太子講団子，凍み餅のじゅうねんタレかけ，里芋の唐揚げ，はやとうりの酢漬け，ゼンマイの白和え，じゃがいもの味噌炒め，昆布の漬け物，山菜と油揚げの炒め物の計8品のユニークな料理を提供していただいた．

表 3　2012 年度活動スケジュール

訪問回	訪問日	訪問人数	活動スケジュール
第1回	平成24年 9月29日 ～30 日	7名	29日午前　移動 29日午後　町役場への挨拶 移動観察(資料収集) 29日夜　意見交換・交流会 30日午前　移動観察(資料収集) 30日午後　世帯へのヒアリング調査 30日午後　移動
第2回	平成24年 10月27日 ～28日	17名	27日午前　移動 27日午後　資料収集(直売所) 27日午後　郷土料理の魅力再発見 27日夜　意見交換・交流会 28日午前　報告会 28日午後　移動

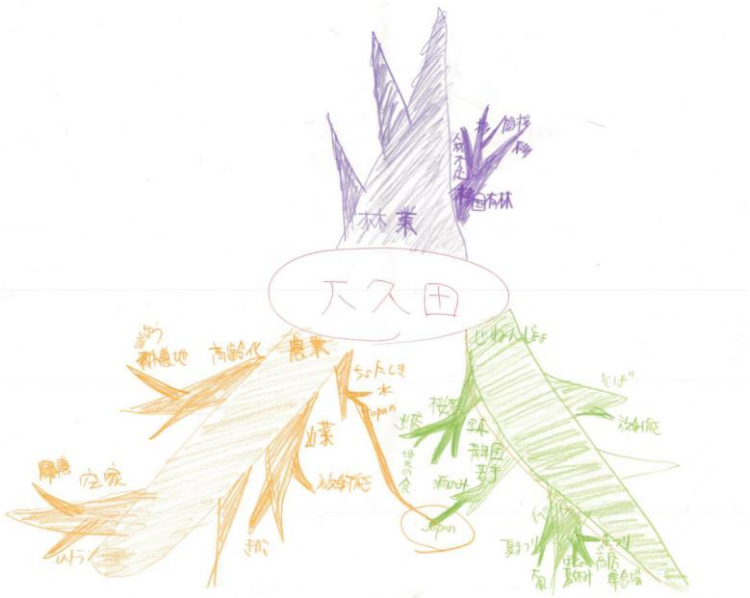

図 3　マインドマップの一例

写真 1　郷土料理の一例

２．大久田地区の課題

ヒアリングおよびアンケート調査から，地区の課題が見えた．まず世帯構成を把握すると，平均世帯規模は3.5人，町外へ転出した平均世帯人員は2人であり，転出者の3分の1は世帯主の兄弟姉妹，残る3分の2は世帯主の子供世代であった．地区外への転出者が世帯主の子供世代の場合，頻繁に大久田へと訪問している特徴もあった．地区の人口減少が将来さらに進んだとしても，地区外に暮らす世帯構成員の頻繁な訪問によって，地区が維持され存続する可能性が示唆された．

農業に関する課題では，古殿町には道の駅を含めた3ヶ所の直売所が立地している．しかし，いずれの直売所も大久田地区外に位置し，出荷と回収の手間がかかることから，道の駅に出荷する大久田の農家は少なかった．農業の課題にはイノシシやハクビシンによる獣害の問題もあった．電気柵による対策が取られ，町ではイノシシ捕獲に補助金を用意しているが，猟師の高齢化による担い手不足のため，被害は簡単には収まらない状況であった．

林業に関する課題では，大久田地区では林地のうち79%にスギが植えられており，スギ生産に大きな特徴を見いだせたが，林業の整備は地区全体を通してあまりなされていなかった．その最たる要因は木材

価格の低迷にある．大久田地区内での林業の担い手は高齢化が進んでおり，60歳以上の従事者に大きく偏っていた．国有林が拡がっているため作業量はあるものの，地区内の人材不足や一般競争入札の導入によって地区内だけで作業を受けきれず，会津を含め地区外の事業者の進出を許している状況にあった．また，地域の基盤産業である農林業の後継者問題では，農地よりも林地のほうが深刻な後継者問題を抱えていることがわかった．大久田地区ではこのような人材不足の問題を解消し林業の担い手を育てるため，長期間に渡る技術育成を支援する「緑の雇用担い手対策事業」も2002年から実施してきた．

３．大久田地区の魅力

まず，大久田地区には広く知られる名勝として「越代の桜」がある．樹齢約400年の山桜は県指定文化財として認められ，林野庁の「森の巨人たち100選」にも選ばれている．越代の桜の整備にも地区の人は力を注いできた．国有地に含まれるため林地整備のため伐採も検討された経緯があるが，地区の重要な文化財として，町の教育委員会を説き伏せ，保存すべき文化財としての位置づけを得ることに成功した．越代の桜の周辺は，越代のサクラ公園として整備されており，毎年「越代のサクラ祭り」も行われている．有名な桜であることから，地区外からの観光客を数多く受け入れている．マインドマップ作成においても，「越代の桜」は最も多く記述されたキーワード(14個)であった(図 4).

自然景観として「大風川の渓谷」もある．トレッキングコースとして整備されており，落合の滝や鎮巌の滝，紅葉，かたくりの花など，四季を楽しめる見所がある．地区のいたる所で見られるスギ林も立派な景観である．きれいに植林され，手入れの行き届いたスギ林は初めて訪れる者にとって，自然と人間の融合を感じさせる素材である．さらに，「延命の清水」も自然の豊かさを表している．自然のわき水である「延命の清水」は越代延命の清水保存会によってきれいに整備されている．マインドマップにおいても，「山菜」9個，「杉」8個，「食」「山」7個，「延命の清水」「林業」6個であり，大部分の人が記載したキーワードは，目で楽しむことの出来る自然の要素であり，豊かな自然が地区の財産であると言えよう．

また，大久田地区には人材の力がある．地区は区長を中心として地区内13班の班長，各世帯と地区内の統率体制が長く続いており，地区内をまとめ上げるリーダーシップがある．また，既に10年以上の活動実績を持つ「じねんじょ倶楽部」も地区内にある．構成員は20人程度で，彼らが30歳代の頃から活動を行っている．越代の桜の保全を行ったり，耕作放棄地の転作としてそばの作付けも行ったりしてきた．構成員は既に40歳代に達しているが，行動力のある組織である．大久田地区は先に指摘した問題を憂う人材の活動によって，新たな取り組みも続けられている．例えば，秋に地区で行われている湯殿山の祭典に，花相撲大会を開催している．これは県の地域づくり総合支援事業のサポートを得て，ポスターを作成しPRに力が入っている．また11月には古殿町ロードレースイベントを大久田地区に呼び込むなど，活動に力が入っている．

郷土料理も魅力の1つである．マインドマップにおいて学生にしかみられなかったキーワードのうち13個は食に関するものであった．この最大の要因は「郷土料理の再発見」に影響を受けているためである．しかしながら，地区の方が挙げた食に関連するキーワードは「山菜」「野菜」「蕎麦」の3つだったことを考えると，地区には伝統食の魅力がまだまだ秘められていると指摘できる．食の魅力は地区住民にとってみれば日常の生活に組み込まれ，当たり前と化しているが，学生＝外の人間の視点からは都会の日常生活では全く食べることの出来ない貴重な存在である．

他方，地区住民の挙げたキーワードは，生活に関連するものが多かった．特に，「販売」(5個)や「出店」「露店」(2個)といったキーワードは経済的課題を取り上げているため，収益の確立が喫緊の課題と言えよう．これまで経済活動として光の当てられて来なかった「食」を活かすための課題として，いかに外部へのPRを行い，認知度を高めるかが重要な課題である．その上で商品化と現金化へ結びつけていく方法を考える必要がある．

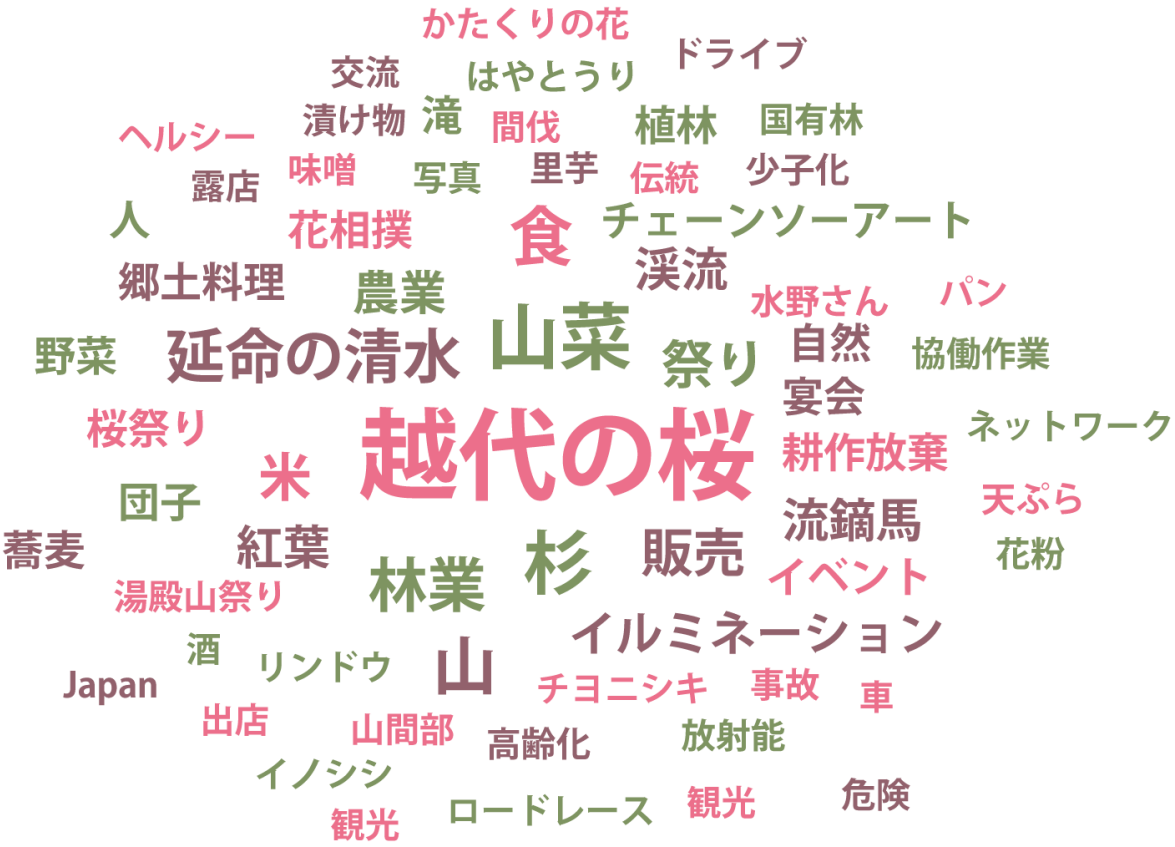

図 4　マインドマップ作成によって得られた 64 のキーワード

注：文字の大きさは出現回数を反映している．
　　文字の色，配置はランダムである．

４．活性化策の提言

以上を踏まえ，我々が考えた大久田地区の活性化案を表 4 にまとめた．それぞれのアイディアのメリットとデメリットを整理し，それらを考慮して実現の可能性を 3 段階で評価した．

まず，直売所の活用に関しては農家の現金収入の拡大につながる効果が期待出来るが，大久田地区の地形環境から農業の大規模化は難しく，継続して商業作物を生産することは難しいと判断した．郷土料理の提供は，これまで記述してきたように外部の人にとっては魅力的なツーリズムとなる．提供する場所と，住民の時間の確保という課題はあるが，工夫次第で収入源になり，地区内の女性が活躍する場となるであろう．山菜採り体験の実施やイノシシ狩りの受け入れは，緑豊かな大久田の山林から得られる地域資源を，地域外からの訪問者と結びつけるアイディアである．受け入れの体制がきちんと整備され

れば，交流人口の拡大を期待できる．残念ながら，放射能の問題があり現時点での実現可能性はやや低い．

地域貢献として教育との接点を持つことは，経済的価値以外の社会的価値を高めることになりうる．林業の重要性を広く周知し，将来的に林業の担い手になる可能性を高めることにつながる．またアグロツーリズムの1つとして林業体験を用意することも交流人口を増やす対策となる．受け入れ体制を構築するのは容易ではないが，林業の重要性を体験できるレジャーは都会の人に受け入れられる余地があると思われる．また，バイオマスの活用は林業との相性がよい．発電設備やボイラー設備の初期費用が高いことや事業採算性が低いという問題から活動開始の敷居は高いが，間伐未利用材の活用や先進的なエコシステムの導入という社会的な評価は高い．

大久田地区の場合，先に地区の魅力で指摘したように，既に地区内で活動が活発に行われてきた．活動を続けている大久田地区だからこそ，活動を絶やさないためのアイディアの種をまき続けることが大事であるとおうのが，我々の１年目の提言である．

表 4　活性化案

方法	カテゴリー	可能性	メリット	デメリット
直売所への農産物出荷	資源の活用	△	収入源	大量生産が難しい
郷土料理の提供	ツーリズム	◎	収入源，女性の参画	場所と時間の確保
山菜採り体験の実施	ツーリズム	○	郷土料理と連携，交流人口	放射能の問題
イノシシ狩りの受入れ	ツーリズム	○	獣害対策，交流人口	放射能の問題
林産物教育の展開	資源の活用	◎	地域貢献	収入と結びつかない
林業体験の実施	ツーリズム	○	林業を活用，交流人口	担い手の確保
バイオマス発電の導入	資源の活用	△	林業を活用，エコシステム	初期費用が大きい

Ⅳ．本年度（2013 年）の事業

１．事業概要

本年度は 1 年目の活動を踏まえ，表 5 に示した活動を行った．

表 5　2013 年度活動スケジュール

訪問回	訪問日	訪問人数	活動スケジュール
第 2 回	平成 25 年 5 月 2 日 ～4 日	5 名	2 日夜　　移動，民泊体験実施 3 日午前　「越代のサクラ祭り」に参加 3 日夕方　祭の反省会に参加 3 日夜　　民泊体験実施 (薪割り体験) 4 日午前　大辷山登山 4 日午後　今後の活動について話し合い 4 日夕方　移動 後日，民泊についての意見交換（FAX による）実施
第 2 回	平成 25 年 7 月 13 日 ～ 14 日	5 名	13 日午前　移動 13 日午後　林作業見学 13 日夜　　民泊体験実施 ・自家用畑で収穫体験，収穫物で夕食作り ・広い敷地と人通りの無さを利用し，花火を実施 ・民泊についての意見交換 14 日午前　「八雲神社祭り」参加 14 日夕方　移動
第 3 回	平成 25 年 9 月 7 日 ～8 日	3 名	7 日午前　移動 7 日午前　「湯殿山祭典」神社参拝に参加 7 日午後　「はっけよい大久田」花相撲大会出場 7 日夜　　民泊体験実施 8 日午前　次回活動について地区の方々と話し合い 8 日昼　　移動
第 4 回	平成 25 年 10 月 12 日 ～13 日	11 名	12 日午前　移動 12 日午前　流鏑馬の準備見学 12 日昼　　翌日の露店出店のための買い出し，農産物収穫体験 12 日午後　出店の準備．地区の女性方から調理法伝授 12 日夜　　民泊体験実施 13 日朝　　「古殿八幡神社例大祭 流鏑馬・笠懸」見学，出店準備 13 日昼　　郷土料理の露店出店（すいとん汁） 13 日夕方　撤収，移動

今年度の主な活動のひとつは，季節ごとの祭りへの参加である．祭りを利用し地区の方々と協同で活動することで，住民側との一体感を得ることができ，まずは我々自身が外部からの訪問者として地域の魅力を感じ取ることができるのではないかと考えた．10 月の「古殿八幡神社例大祭 流鏑馬・笠懸(やぶさめフェア)」では前年度の活動で提案した「郷土料理の提供」を実現するために，地区の野菜を用いた「すいとん汁」の露店を出店した．その際，購入者に対して古殿町についてのアンケートを配布し，今後の大久田地区および古殿町の活性化策の参考とした．

また，ひとつは民泊の実証実験である．大久田地区には祭り・イベントが多くあるにも関わらず，宿泊施設がない．そのため外部からの訪問者が地域に浸る時間を十分に作れず，住民側も外部との関わりが薄くなりがちである．しかし，新しく施設を建てるには時間を要し，財政的なリスクも高い．そこで，既存の住居を活用する「民泊」という手段を取ることにより，施設を建てるよりも宿泊が実現しやすくなり，アグロツーリズム的な要素も取り入れながら外部との交流をはかり，より地区内の現金収入に結びつけることができるのではないかと考えた．

２．民泊実証実験

２.１　民泊実証実験の概要

写真 2　民泊実験で行った体験活動

民泊体験は前大久田区長の水野氏とそのご家族に全面的に協力いただき，自宅に宿泊させていただいた．年間を通したツーリズムを発見し体験する目的で，5 月，7 月，9 月，10 月の 4 回にわたって訪問し，様々な体験活動を行った．写真 2 に，そうした体験活動の一部を示した．5 月は地区内の「大辷山(おおつぺやま)」登山を行い，タラノメ等の山菜採りを行った．また，薪ストーブに使用する薪割りの体験も行った．7 月には，「有限会社水野林興」の林作業現場(下草刈り，間伐作業)，作業用機械の見学を行った．夜は，広い敷地と人通りの少なさを利用し，花火大会を実施した．また，7 月と 10 月の訪問では，庭先の農地での農作物収穫体験およびそれらを使った調理も行った．晴れた日の夜には満点の星空を観賞した．その他にも，全ての訪問を通して地場の農産品を使用した様々な家庭料理を頂いた．

２.２　民泊に関する意見交換

民泊体験終了後，学生へのアンケートおよび受け入れ側へのヒアリングによって，民泊についての意見・感想を調査した．学生からの意見は，以下①，②，③に示す通りである．

① 今回の民泊で良かった点

【星空】
・星がきれいに見え，近所迷惑の心配がない．アウトドアでワイワイしたい人にはうってつけ．
・夜の星や静けさ．
・星が大きくて多くて驚き，思わず叫びました。毎日見上げたい！
・自然の豊かさ（夜の星空，静けさ，緑の豊かさ）．

【食事】
・普段から地元の方が食べているような料理をたくさん食べられたこと．
・食事（野菜のおいしさを満喫できる）．
・地域でとれた食材を使ったヘルシーな和食．

【交流】
・地区の方々と山歩きをして大久田の地域事情について聞けたことがとくに良かった．
・地域の人と直接会話でき，「訛りっていいな」と感じた．
・迎える側の方々が非常にフレンドリーで，とてもリラックスしたムードで民泊ができたと思う．
・民泊と祭りの手伝いを通し，地区の方々との距離が近づいた．
・ホストファミリーとの会話や食事を通し，知らなかった名所，郷土特産品など教えてもらえた．

【宿泊環境】
・木のぬくもりを感じられた．
・ホストの方との別棟生活．気にせずワイワイできる．
・泊めていただいた家族の方々と別棟（お風呂や寝室），食事は一緒．気を遣い過ぎなくて良かった．
・トイレが洋式（お腹がゆるいため）．小さい子供などでも生活しやすい．
・圏外による携帯から離れた生活．
・優雅な時間の使い方（電波が入らないのでメールやネットから解放される）．

② 改善したほうが良い点

【交流】

・ただ泊まるだけだともったいない．地域の案内役がいて，案内してくれるといいと思う．

・自然の中で暮らす人々の知恵は本当に素晴らしい．それを知ってもらうことが必要だ．

・今回は祭りへの参加があったため地区の人と顔を合わせる機会が多くあったが，これだけ交流できたのは，去年から関わりがあったこと・我々が事業を行っていることが要因だと思う．もしも全く知らない人が民泊に来た場合，我々のようには地区の方々と交流できないのではないか．民泊の際には，地区の方々が積極的に動き，地区全体で歓迎するような雰囲気作りも大切だと思う．

【情報交換】

・付属品の告知（布団何人分，お風呂用品等々）があれば，無駄な荷物を減らせると思う．

・年間でどのようなイベントがあるのかを知りたい．イベントカレンダーのようなものがあると，また次のイベントに行きたくなるかもしれない．

・民泊にどのくらい費用がかかるのかわからない．

・実際に民泊を行うとしたら，どこに何円で泊まれてどのような体験ができるのか，情報発信が必要だと思う．

【宿泊環境】

・虫対策（耐性の無い人がいるかも）．

・寒さ対策（冬場）．

③ 今後，民泊で体験してみたいこと

【林業体験】

・林業機械が現場で本当に動いている様子を見てみたいと感じた．

・木を使った小物作りは，子供や女性が非常に喜ぶと思う．

・木工工芸の体験（雨の日対策として）．

・木工手作り体験をしてみたい．

・薪拾い，焚き火で芋などを焼く．

【農業体験】

・農業体験（季節を感じさせるものが良いと思う）．

・農作業体験（植え付け，草取り，収穫など）．

・そば打ち体験．

・地域の食材を使い，郷土料理を地域のお母さん方と一緒に作る体験．

【散策】

・地区を散策し，旅行者は通過してしまうようなスポット（例えば植物や風景）をウォーキングのような感じで，地元の人の目線で紹介するイベント．

・地場の木材を使ったベンチを活用し，登山の後の頂上での食事．

・山菜採り．

【観察】

・星空観測（要基礎知識 or 資料，懐中電灯など）．

・生き物観察．ホタルも，ドジョウも見てみたい．
【土産】
・何か思い出品の持ち帰り（作成，採集）．
・宿泊客に，自分の畑や地元で採れた野菜を，手紙や季節の写真・レシピ等を添えて送る．地域の温かさが感じられ，宣伝・クチコミ効果につながるかもしれない．

以上のように，学生たちは自然環境や郷土料理，住民との交流等，地域の良さを知ることができた．学生の感想からも分かるように，星空や夜の静けさ，既にいる生物，訛り，地域住民との交流，ちょっとした風景，庭先の農地，林作業見学，木の枝など，既存のものや小規模なもの，地区住民にとっては当たり前のことが外部の人間には新鮮に感じられ，ツーリズムとして成立しうる．しかし，我々は民泊実施前から受け入れ側との交流があったため，そこから来る気遣いもあり，民泊にかかる正確な費用を教えていただけなかった．その他宿泊に関する情報発信の方法が改善点として挙げられた．また，顔見知りでない一般客の受け入れが可能かどうかという課題も残っている．

受け入れ側の意見としては，個人の宿泊客を自宅で受け入れることは歓迎であり，積極的に行いたいが，宿泊客が大人数だった場合に問題が生じるということであった．すなわち，地域ぐるみの観光ビジネスとして大人数を受け入れるには，地域住民間の連携が必要である．しかし，交流のある近隣の住民だからこその気遣いや遠慮があり，自分たちが自発的に声をかけて民泊を実施するのは多大な精神的負担・実務的労力を伴う．地域住民同士がスムーズに連携をとるためには，中立的な立場である行政が観光客と住民の仲介役となり各世帯へ民泊受入れを呼びかけるなど，公に組織だった支援が必要だと考えている．情報交換や体験活動の推進についても，行政による支援が重要となってくるであろう．

３．祭りへの参加

今年度の 4 回の訪問の全てにおいて，地区で行われる祭りに参加した(写真 3)．5 月の「越代のサクラ祭り」は，Ⅲ-３においても述べたとおり，名勝「越代の桜」のある「越代のサクラ公園」において行われる，大久田地区の一大イベントである．我々は，運営本部の会場設営と撤収作業，子供向けのゲームの出店，および前述した「じねんじょ倶楽部」の手打ちそばの出店の手伝いを行った．祭り終了後の反省会では，学生それぞれが地区内の様々な方と会話し，交流を深めることができた．ここで，大久田地区の中には「じねんじょ倶楽部」の他にも，消防団，祭りの実行委員，同級生のつながりなど，地区ぐるみの交流や活動が多く残っていることを知った．反省会では，地区内で活動するこれら数十名の住民たちが年代を問わず酒を酌み交わして楽しんでいた．筆者はある住民から「地区のためにこのように沢山の人が集まり，協力してイベントを行っているが，ここまで来るには様々な人間関係のしがらみがあり，影では大変なことも多いのだということを分かってもらいたい」という話を聞いた．確かに年代や集落を超えた住民間の協力は，一朝一夕には成し難く，人口減少の中で維持するのもまた多大な労力が要るであろう．だからこそ，苦労の末に作り上げられた住民同士の密な交流は，地区の貴重な財産である．今後，地域の活性化のためにもっとも活用できるものと言える．そのためには，このような人と人との繋がりを，人口減少の中においても守っていく仕組みが必要となるであろう．

7 月の「八雲神社祭り」では，境内の掃除や儀式に参加した．八雲神社祭りは区長，副区長と地区内 13 班の班長，神社の地主，神主のみが参加する小さな祭りである．午前中から境内を掃除し，祈祷し，

昼から夕方まで境内の中で飲食を行う．ここでも，サクラ祭りと同様に班長の方々と会話し，交流を深めた．八雲神社祭りはその小さい規模から，地区住民の認知度は高くないという．このように，ひっそりと小さく行われる祭りも，地区の歴史と伝統を示すものであり，住民の交流の場となる．祭りの規模は変えずとも，神社の存在や儀式が行われていること，その歴史については住民および外部の人間に知らしめる価値がある．

9 月の「はっけよい大久田―湯殿山祭典―」では，教員 1 名，学生 1 名が毎年恒例の花相撲大会に力士として出場した．湯殿山神社は大久田地区の鎮守であり，山形県の湯殿山神社から勧請された五穀豊穣の神様が祀られている．花相撲大会は，前述のように 2011 年度より県の地域づくり総合支援事業のサポートを得て，ポスターを作成するなどし，PR に力が入っている．地区内外の子供たち，および ALT(外国語指導助手)が多く参加し，老若男女も国籍も問わず賑わった．外部からの大会参加者には，赤飯や弁当，オードブルが振る舞われた．

ところで，このようなもてなしの機会にこそ，郷土料理を振る舞うチャンスではないだろうか．悪い言い方をすれば「どこでも食べられる」オードブルよりも，「古殿町・大久田地区でしか食べられない」郷土料理の方が観光客の心をくすぐり，古殿・大久田ファンを増やし，口コミという形で祭り参加者や出場者の増加につながるのではないかと思われる．

そこで，10 月に行われた古殿町最大のイベント「やぶさめフェア」においては，前年度の活動でも提案した「郷土料理の提供」を実現するために，地区の野菜を使用したすいとん汁を販売した．以下にその詳細を記載する．

写真 3　左上：越代のサクラ祭り，　右上・左下：八雲神社祭り，　右下：はっけよい大久田

４．郷土料理の露店実験

４.１　郷土料理販売の概要

郷土料理販売は大久田区長，前区長，女性グループである「おおぎの会」の協力により実施した．計画開始当初は，古殿町の伝統料理である「太子講団子(写真 4)」を調理・販売する予定であったが，材料を切っておき当日ガスコンロで加熱するばかりにしておかなければ出店が間に合わないということと，「祭りの露店」という形態で太子講団子は作りづらいという「おおぎの会」の方々からの助言により，昔懐かしい「すいとん汁」を販売することに決定した．

食材は前区長宅で学生たちが収穫した野菜と，「おおぎの会」メンバーの方々の自家製野菜，道の駅の直売所で購入した野菜が中心である．出店前日の 12 日に食材を調達し，食材の下準備も兼ねて「おおぎの会」の方々から調理法を伝授していただいた．出店当日は，予め切っておいた野菜をガスコンロで煮て，すいとんをその場で作って投入し，味噌・醤油等で調味して販売した(写真 5).

写真 4　太子講団子

写真 5　左：調理法を教わる学生，　右：すいとん汁

「すいとん汁」は大久田・古殿町独自の郷土料理というわけではないが，地区内産・町内産野菜をふんだんに使用した点で「ここでしか食べられないもの」であり，販売の際にはそこを PR した．その結果，合計で 217 杯販売することができた．また，販売の際に古殿町についてのアンケートを配布・回収した(後述). すいとん 1 杯 150 円のところ, アンケートに回答すると 1 組につき 50 円引きにすることで, より多くの購買者に回答を得られるようにした．このように，今回は調査も兼ねたために利益は度外視して販売実験を行ったが，その収支は以下の通りである．

	すいとん売上	28450円
-）	材料費(*)	24101円
	収益	4349円

＊材料費は，食材・食器代，ガスコンロレンタル料金等を含む.

これは前述したアンケートの割引を含めた売上である．アンケートの割引を行わずに定価の 150 円で販売した場合，収支は次のようになるであろう.

	すいとん売上	32550円
-）	材料費	24101円
	収益	8449円

このように，販売に不慣れな学生たちが利益を度外視した食材選び，およびアンケートの割引をしても収益が出ること，割引を行わなければさらに収益が出ることがわかった．調理と祭りに慣れた地区の方が様々な郷土料理を販売すれば, 学生が作ったものよりさらに美味しくなり, 高値で売れるであろう. また，郷土料理販売が毎年恒例のものになれば，口コミにより人気が出ることも考えられる．今後，郷土料理を祭りの出店で販売することは，観光客に大久田地区をよく知ってもらうだけでなく，地区の現金収入にもつながると言える．特に，2012 年度の郷土料理の魅力再発見で提供された「里芋の唐揚げ」や「じゃがいもの味噌炒め」等は学生の人気が高く，美味しくて空腹も満たされるスナックとしてすぐにでも売ることができそうであった．今後はそれらの販売にも挑戦することを考えている(写真 6).

写真 6　左：里芋の唐揚げ，　右：じゃがいもの味噌炒め

４.２　古殿町についてのアンケート調査

前述のように，すいとん汁販売の際，古殿町の魅力や郷土料理に関するアンケート調査を実施した. すいとん汁購入者 1 組につき 1 枚ずつ配布し，83 枚の回答を得た．アンケート結果を以下に示す.

まず，下図 5 の Q1 をみると，購買者は古殿町内 21 組，古殿町以外の福島県内 55 組，福島県外 7 組であり, 町外からの来場が多いことがわかる. 特に, いわき市から訪れたのが 12 組であり最も多かった. 地域色を出した郷土料理は，町外からの観光客の興味をひくと考えられる．また，Q2 により家族で訪れている購買者が多く，恋人と訪れた購買者はいなかった．この理由として，流鏑馬というイベント自体

が家族向けであり，若者のデートには利用されにくいこと，あるいは「すいとん汁」自体が親世代・祖父母世代に懐かしいものとして受け入れられやすいことが考えられる．

Q3 からは，「やぶさめフェア」にはリピーターが多いことが読み取れる．福島県外からの来場者では，「初めて」の来場が最多の 5 件であったが，古殿町内および福島県内からの来場者では，それぞれ 85%，60%が 2 回目以上の来場であった．他方で，Q4 により町外の来場者は「越代のサクラ祭り」へ行ったことがある人が多いが，それ以外の他の町内イベントに足を運ぶ人は少ないということも分かった．1 組あたりの人数を確認すると，町内では平均 7.33 人，県内では平均 3.12 人，県外では平均 2.33 人がグループとして来場していた．家族での来場が多いことも関係するのか，大人数での来場が多くなっている．

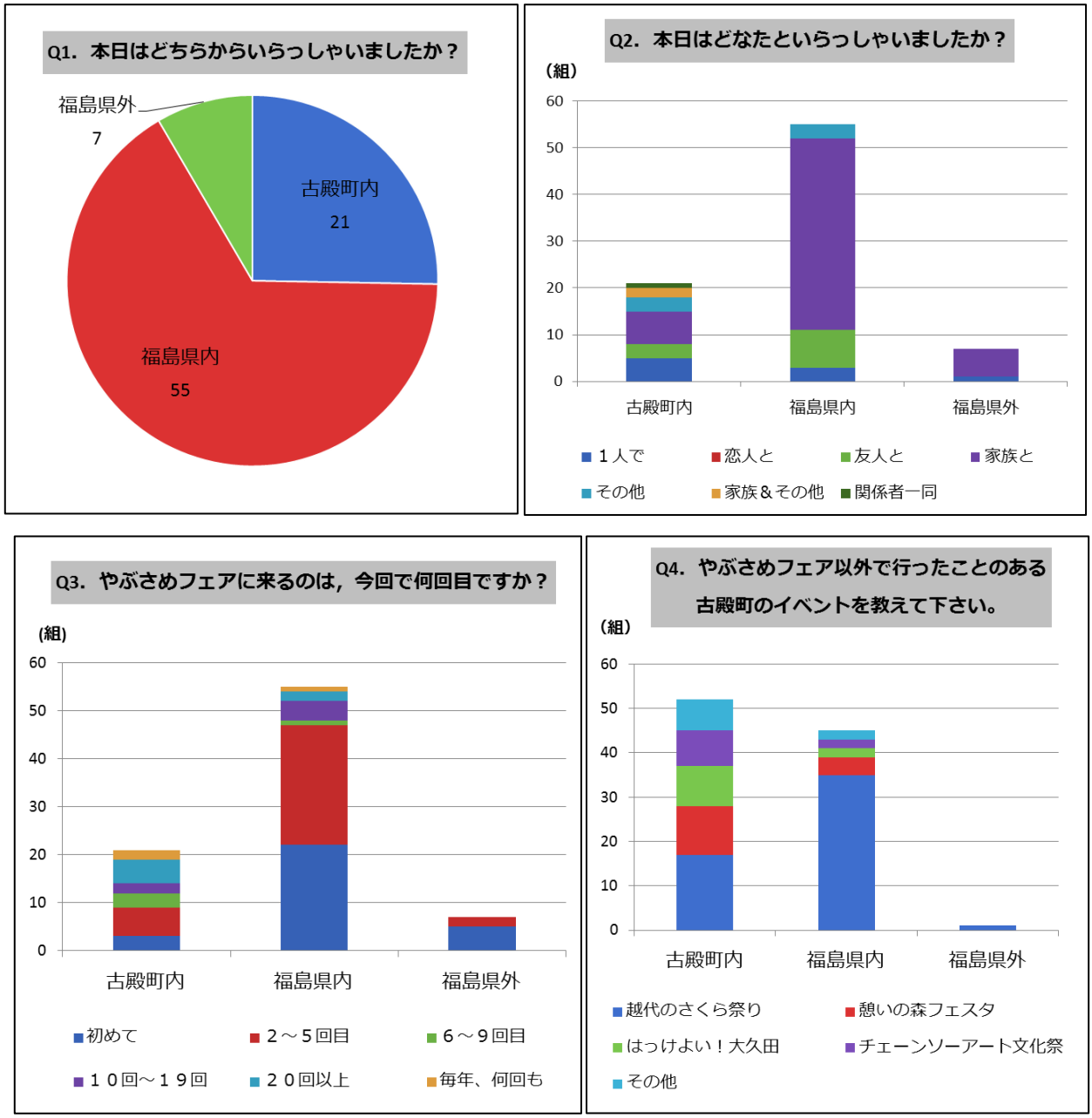

図 5　アンケート結果①

表 6　来場人数（単位：人）

来場人数	古殿町内	福島県内	福島県外	総計
合計	110	159	14	283
1組あたり平均値	7.33	3.12	2.33	3.93
1組あたり最大値	40	20	4	40
1組あたり最小値	1	1	1	1

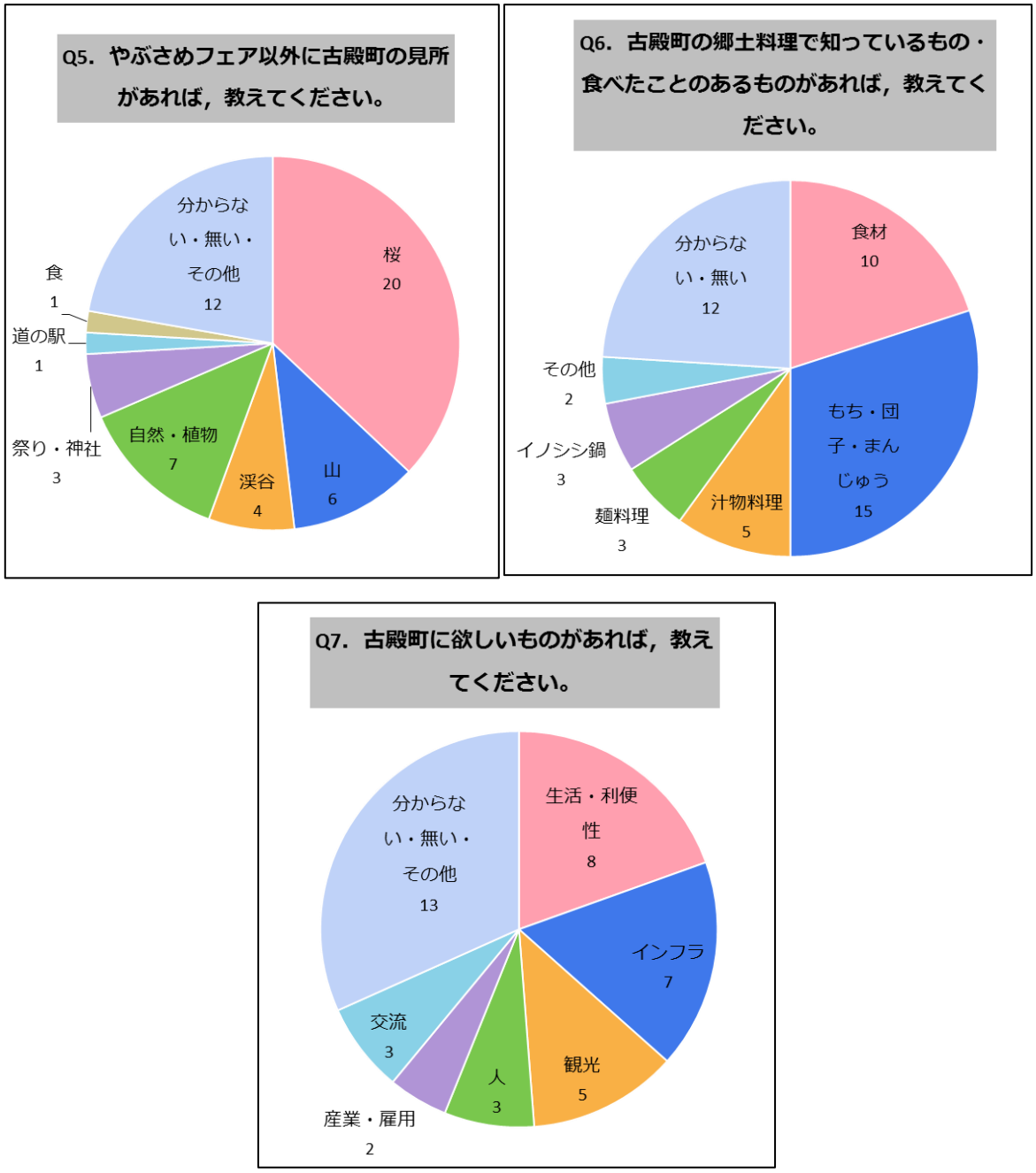

図 6　アンケート結果②

表 7　郷土料理の回答者

	食品名の個数／回答者	わからない・無い・無回答／回答者	回答できた人／回答者
古殿町内	0.76	0.67	0.33
福島県内	0.40	0.64	0.36
福島県外	0.00	1.00	0.00

アンケートでは，古殿町の見所，知っている郷土料理，ほしいものについても尋ねた(図 6)．古殿町の見所として，最も多かったのは「桜」である．これには「越代の桜」や「山桜」等の回答も含んでいる．次いで，山，渓谷，自然・植物といった，目で楽しめる自然景観を見所とを感じている人が多いようである．これらの傾向は，前年度実施したマインドマップにおいて，大部分の人が記載したキーワードが「桜」や「自然」であったことと類似している．やはり，桜をはじめとした豊かな自然環境が地区の最大の観光資源となっているようである．一方，我々が注目した「食」を見所として挙げたのは 1 名にとどまった．Q6 の古殿町の郷土料理では，もち・団子・まんじゅうといったものを挙げる人が多かった．具体的には，ゆでもち，凍み餅，じゅうねんおはぎ，ねむった焼き，かぼちゃまんじゅう，あげまんまといった郷土料理の回答を得た．そのほかに，こんにゃく，きのこ，みそ，酒といった食材，そば，じゅうねん冷やしだれうどんといった麺類，イノシシ鍋等の回答が得られた．回答者 1 人あたりの回答数をみると，古殿町内が最多で 0.76 個であるが，郷土料理を回答できた人数は町内の回答者の 3 割程度であり，町外回答者の割合よりも少ない．これは，郷土料理に詳しい数名が多くの食品名を回答したが，ほとんどの人は郷土料理を知らないということを示している．福島県内で郷土料理を回答した人は県内回答者の 36%，県外では 0 人であり，郷土料理が町内・町外問わず浸透していない状況が垣間見られた．しかし，我々のこれまでの活動を通し，郷土料理は外部の人にとって目新しく，魅力の一つであることが推察される．魅力ある「食」が町内外問わずあまり認知されていないことからも，地域活性化のためには「食」の魅力アピールが有効な手段であると言えよう．

最後に，Q7 の「古殿町にほしいもの」は，古殿町内含めた福島県内からの回答がほとんどであった．町内外問わず，回答多くがスーパーマーケットやデパート，食堂などの生活・利便性に関するもの，文化センター，子供の遊び場，公園，図書館といったインフラに関するものであった．住民が主に生活の利便性を求めている事が分かる．それ以外では，宿泊所，農家民宿，温泉，乗馬体験といった観光に関するものや，大学生と住民で作る市民農園，地元住民が連携できる交流の場，都市住民と共有の宿泊所，都市交流の場など，町内外の住民同士の交流を求める声も一定数あった．ここから，「宿泊」や「交流」の存在が町内外の住民にとって重要であることが分かる．今年度，我々が実験を行ってきた民泊や体験活動は，そうした宿泊および交流の問題を解決することにもつながり，同時に農業体験や郷土料理体験，ホストの提供する家庭料理等によって「食」の魅力を外部へアピールするのにも有効な手段だと考えられる．

５．まとめ

これまで述べてきた一連の活動をまとめると，以下の 5 点にまとめることができる．

① 自然景観や郷土料理，人々のつながりなどは外部から見ると新鮮で貴重なものであり，これらを財産として地域活性化のために活かすことができる．

② 今回実施した民泊や体験活動，郷土料理販売は，観光に十分活かすことができる，地区内に現金収入をもたらしうるものである．

③ 民泊は地区の魅力を満喫することができ，宿泊の問題も解決できる手段である．

④ 民泊を住民だけの力で自発的に推し進めるのは精神的負担や実務的労力の問題から難しいといえる．住民同士の連携を促し，観光客を民泊で受け入れるには，公的支援が必要である．

⑤ アンケート結果から，自然景観は見所として認知されていることがわかった．今後は「自然景観」の要素以外の「伝統」や「郷土料理」等も，地域の魅力としてさらに発信していくことが期待される．

Ⅴ．おわりに

以上，2012 年度，2013 年度の 2 年間にわたる我々「東北大学地域密着 Lab」と大久田地区の方々の活動について述べてきた．本報告書内で繰り返し強調したように，大久田地区には豊かな自然と名勝，多くの伝統行事やイベント，それらを支える力のある住民の協力関係，美味しく珍しい郷土料理，祭りを訪れる観光客…と，素晴らしい資源が数多く存在している．既に「活性化している」と言っても過言ではない地区なのである．だからこそ，それらの資源を活かして「何によって衰退を食い止めるか」今のうちにしっかりと考え，手を打っておくことが重要になってくる．

そのために，我々が今回行ったのは「民泊体験」と「郷土料理販売実験」であり，結果的にどちらも十分に手応えのある活性化策だということが分かった．ただし，これらを本格的に推し進めていくためには,「やってみたい」という住民の気持ちや, やりはじめた活動を支援する公的な仕組みが重要である．それは例えば，住民が手を挙げやすい民泊受入募集の案内であったり，宿泊客と住民側との仲介であったり，ホームページ等での宣伝であったりするであろう．

今後,「民泊」や「郷土料理販売」が地区内で実践されれば，我々にとってこれほど嬉しいことはない．しかし，ユーモアがあり，活力に溢れた大久田地区の方々である．さらに頭をひねって考えれば，我々が考えたことなどよりもより面白く，より有効な活性化策が出てくるかもしれない．それをアイディアで終わらせずに，たとえ失敗しても良いので実行に移してみる，その一歩を踏み出すことが，今後の地区活性化のために最も重要なことではないだろうか.

謝辞

本報告書の作成にいたるまでの間，多くの方々の御協力を賜りました．大久田地区区長の平松様には，地域の方々と我々の仲介役として多大な御協力を賜りました．また，大久田地区や林業についての貴重なお話も賜りました．前区長水野様およびご家族の皆様には，宿泊場所を提供いただいただけでなく，林業体験をはじめとする様々な体験活動をお世話していただきました．「おおぎの会」の皆様には，郷土料理販売において多大な御協力を賜りました．また，大久田地区の皆様，古殿町役場および福島県地域振興課の職員の皆様には，2 年間の活動を通し，様々な面でお世話になりました．この場を借りて厚く御礼申し上げます．

2013/10/13 撮影